



「鳥の湖」の危機

「いまの話、クロリーナのききまちがえだろ？ だって、もしも人間がトーケルン湖を乾かして、底を畑にしてしまったら、どうなると思う？ そんなことになったら、おとなのマガモが食べるウキクサやヒルムシロはなくなるし、ひなたちが食べるボウフラやオタマジャクシもいなくなるし、飛べるようになるまで隠れていられる

（上巻 353頁）

ガンの群れと旅を始めて1ヶ月足らずの4月、ニルスたちはエステルヨートランド地方のトーケルン湖にやって来ます。怪我をして人間に捕獲されたマガモのヤッコは、世話をしてくれる農家の人間たち、とりわけ3歳の男の子ペール・オーラと仲良くなりますが、猫のクロリーナが飼い犬のセサルに話していた「干拓」の話を聞き愕然とします。人間がそんなひどいことをするはずはない…しかし、自らも「おとりがも」として利用され、仲間が目の前で殺され

スウェーデン再発見

ニルスと旅する

NILS HOLGERSSON'S UNDERBARA RESA GENOM SVERIGE

スウェーデン



今から100年以上も前、小学校の地理の副読本として書かれた「ニルスのふしぎな旅」。スウェーデンでは誰もが幼い頃に読み、心に刻む大切な物語です。今や環境先進国、福祉大国と呼ばれ、女性の社会進出や教育面でも注目を集めるスウェーデンを支え続けてきたものは何なのか…。物語を読み解きながら、その根底に流れる「スウェーデンの力」を探ります。



てしまうことに。やがてヤッコはニルスに救い出され、ヤッコを可愛がっていた3歳のペール・オーラはヤッコを探して湖へ…行方が分からなくなってしまう。

悲しみに打ちひしがれた母親が湖畔に佇むと、聞こえてきたのはたぐさんの鳥たちの悲しげな鳴き声——そして気づくのです。

「…人間とほかの生き物とは、あまりちがわないのかもしれないかしら」（上巻 368頁）

わ。きつと、鳥たちもわたしと同じように、家や子どものことをいつも心配しているのよ。湖が干拓されれば、何千羽もの白鳥やカモやアビたちが、このトーケルン湖の住みかを失うことになる。そうになったら、どこでひなを育てるのかしら？ 鳥たちは、それが心配なんだわ…（中略）…神さまは悲しみをわたしにあたえて、警鐘を鳴らそうとしたのではないかしら」（上巻 368頁）

そして、両親は干拓計画の中止を決意し、犬のセサールの案内でペール・オーラは無事見つけ出されます。

何が環境に「正しい」か？



「森と湖の国」と呼ばれるスウェーデン。国土の9%をも占める湖を干拓して、畑や牧草地にしようという動きは19世紀中頃から活発になりました。トーケルン湖も例外ではなく、一度は干拓計画が進められましたが、物語の中にもあるように、計画が思い通りにいかずに中断。湿地化した湖にはアシが生い茂り、さまざまな鳥たちが集うようになります。素晴らしいジオトープが二度と人間の手で破壊されないように…作者であるラーゲルレーヴの鳴らした警鐘は100年の間、人々の心に響き続けたのでしよう。トーケルン湖の自然は守られ続け、今でもスウェーデン屈指の「鳥の楽園」となっています。人間が自分たちに有益なこと

「いいかね。おまえがわたしたちといっしょにいて学んだことがあるとすれば、人間はこの世に人間だけで暮らしているのではないということだろう。…」（下巻 503頁）

スウェーデンの子どもたちは字



を書くよりも先にゴミの分別を学ぶと言います。学校教育においては、ほとんどの科目のベースに「環境問題」が据えられ、循環型社会の仕組みや環境保全のためのルール——「何が環境に優しいか」ではなく「何が環境に正しいか」——を当然のように身に付けながら育ちます。環境大国スウェーデン…人間も自然の一部であり、自然は自分自身の一部なのだとする思想の根底には「ニルスのふしぎな旅」が、今でも静かに息づいているに違いありません。

※文献は福音館書店発行、セルマ・ラーゲルレーヴ作「ニルスのふしぎな旅（上）（下）巻」（菱木晃子訳）によります。



挿絵：ベッティール・リーベック 1887-1945
「ニルスのふしぎな旅」の挿絵としてスウェーデンで最も評価が高く、長く親しまれている。